

【中学校部門 最優秀賞】

ジャガイモの皮が教えてくれたこと

智辯学園中学校 3年 山口 瑞月

私の家には畑と田んぼがある。それらは両親と祖父母が世話を
していて、一年を通して色々な作物がとれる。なかでもジャガイモが
とれたときはワクワクする。

我が家では春の終わり、その年最初のジャガイモがとれた日の夕
飯に「ジャガイモパーティー」をする。メインは蒸したジャガイモ。丸々
一個を蒸すため、皿に乗せるとかなりのインパクトがある。食卓には
バターや七味、塩辛などが並んでいて、好きなものを付けて食べる。
食卓の光景を見てるだけでも楽しいのだが、私がこの日楽しみにし
ているものは別にある。それはジャガイモの皮だ。皮はシャキシャキし
ていてほろ苦く、クセになってしまう。今年、「ジャガイモの皮を食べる
のは家のものが多いな」と考えているとその理由に気づいた。それ
は皮の衛生面にあった。スーパーなどで売っているものの皮は流通
の際に何と触れているか分からないため、両親が皮を剥くことが多
いのだ。でも家でとれたものなら収穫したあとは水で洗って保存し
ているだけなので、安全なことが自分たちで確認できる。この「安全
性が自分の目で確認できる」というメリットはジャガイモだけでなく、
家でとれる野菜やお米の全てに通じることだ。そのことに気づくと私
はこの兼業農家の家に生まれて幸せなんだなと思った。

私は今まで、家でとれた野菜もスーパーの野菜も大して変わらな
いと思っていた。でも、このように我が家の野菜は、両親と祖父母の
育てたメリットで支えられている。それに気づくきっかけをジャガイモ
の皮がくれたのだ。食を通して「この家に生まれてよかった」と思え
た。このことから私は、食には栄養摂取だけでなく、何か大切なこと
を気づかせてくれる役目があると思う。これに先立って私の気づい
ていないことをまた食が教えてくれるのではないだろうか。そう考え
ると「いただきます」に今までより心がこもる。